

はれる。Aが闌外左に、Bが右に各一寸八分、Aが闌外右に、Bが左に各五分五厘の紙面を有し、これを一枚の左右として中央から折り摺むだものであると見る時に、表裏の闌内外の關係が全く合致するのは、紙面の體裁の上からこれを證明するに足るものである。その一端が綴じられて居つたものであることは、Aが左端に、Bが右端に於て、三箇處に互に同じ間隔をもつて、綴じ目であつたと思はれる紙面の破れを有して居るのにも疑無い。

この文書は體裁の上から見ても甚だ興味の深いもので、各葉五行毎に朱と墨とで書き別けられて居る。即ちAに於ては初めの三行が朱で、次の五行(即ち第4行か
ら第8行迄)が墨、それに續く五行(即ち第9行か
ら第13行迄)が朱で、残りの五行(即ち
第14
行から第
18行迄)が墨であり、Bに於ては初めの四行が墨で、次の五行(即ち第5行か
ら第9行迄)が朱、それに續く五行(即ち第10行か
ら第14行迄)が墨で、残りが朱である。但しAの最後の五行は初めに朱書したのを抹消して其の上に墨書し、Bの最後の五行は反對に、初めに墨書したのを抹消して其の上に朱書したものである。然も後者はその中の第二行と第三行(即ち斷簡
及び第
17行)とは只だ墨書を抹消しただけで、その上に朱書した形跡はない。かく一葉の何行かづゝ、若しくは毎葉を朱と墨とで(もしくはは他の色で)書き別けることは、摩尼教經典類に於て決して珍らしいことでは無く、從來發表されたものゝ中にも其の類例は少くない。思ふにこれは美麗なミニエーチャーなどゝ同じく、摩尼教經典の有する裝飾的特徴の一つと認むべきである。蒙古の佛典にも同様に數行づゝを朱と墨とで書き別けてあるのが少くないことは、善く人の知る所であるが、その文化の系統の一面を知るものは、多分これが源流をこゝに求めることに躊躇しないであらう。回教經典や回教徒の間に行はれる書籍の間に存する同様の現象については、其の古寫本に關する知識の乏しい自分は、今敢てその本末の關係を推究しようとは思はない。